琉球大学学術リポジトリ

沖縄県における高校中退者・不登校生徒の進路意識に関する総合的研究

メタデータ	言語: 出版者: 藤原幸男 公開日: 2009-07-28 キーワード (Ja): 学校評価, 高校中退, 進路意識, 沖縄文化, 中退体験, 青年期, 学校改革, 生活設計, シマ共同体, アイデンティティ, 適格主義, 深夜アルバイト, 教師の対応, 学区制, 適格者主義 キーワード (En): Okinawa historical-cultural structure, consciousness on Life course and school, adolescence, school evaluation, highschool dropout, school reform, identity, school dropout experience 作成者: 藤原, 幸男, 照本, 祥敬, 長谷川, 裕, 村上, 呂里, 三村, 和則, Fujiwara, Yukio, Terumoto, Hirotaka, Hasegawa, Yutaka, Murakami, Rori, Mimura, Kazunori メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/11529

Ⅲ　シマ共同体に生きる

村　上　呂　里

はじめに

まず、最初にこの章に登場する主だった青年たちについて、かんたんなプロフィールを紹介しておきたい。

Tさん（1961年生まれ）は、村役場に勤めておられ、そのかかわりで、今回、たいへんお世話になった。当初は、研究の協力をお願いしていたのであるが、青年たちとかかわりが深く、青年像のお一人として登場していただくことになった。第45・46代（1986・1987年度）の青年会会長をされ、Mさん、Hさんと活動を共にされてきた。またKくん、Rさんら、青年会のジュニアリーダーの指導にもかかわってこられた。Kくん、Rさんは、このとき青年会の一員としてエイサーなどをいっしょに体験している。大学では、畜産を学び、役場への勤務の一方、農業も営んでおられる。

Mさん（1963年生まれ）は、那覇市内の高校を中退したのち、東京でさまざまな仕事を体験し、20代半ばで島にもどってこられた。Yさんにさそわれたことをきっかけに、青年会活動にかかわり、第48代（1989年度）の青年会会長となった。父親の代より、毎朝、島に朝刊を届けつづけている。現在は、ガソリンスタンドに勤務のかたわら、中学校の部活のコーチとして、中学生の教育にかかわっておられる。実に生き生きと、中学生とのかかわりについて、語ってくださった。

Hさん（1963年生まれ）も、那覇市内の高校を中退したのち、横浜などで働き、島にもどってこられた。Mさんといっしょに青年会の活動に取り組み、手づくりコンサートを企画、運営し、Mさんを引き継ぎ、第49代（1990年度）の青年会会長を勤めた。現在は、かわいい女の子のお父さんである。農業を営むかたわら、何年もかけて大検の資格をとり、現在は、大学の通信教育で、法律を専攻されている。「自分で新しい階段つくって」、これからも「築き上げて」いきたいと語ってくださった。

Tさん、Mさん、Hさんの先輩にあたるYさん（1956年生まれ）については、この章の1節を参照されたい。

さて、昨年（1997年）12月8日に行われた伊波普猷没後五十周年記念シンポジウムで、冨山一郎氏より、他者を「わかったもの」として解釈し、定義し、語ること自体に孕まれた暴力についての問題提起があった。[注①] 沖縄の人々への聞き書きとその解釈の作業を重ねながら、しだいに、この「暴力」について意識するようになった（今も語られる側が感じる暴力について充分に認識しているとはけっしていえないが）。このことは、今も私にとって答えが出ない課題であり、問いでありつづけている。それでも、他者と出会った体験は、表現したいし、伝えたいとおもう。このような葛藤は自分で引き受けるしかないであろうし、こんなふうな場で表現するべきではないかもしれない。それはモノローグでしかないかもしれない。が、この項では、こうした葛藤や問いのもとに、時に「私」という一人称で、書く「私」を現しながら述べていくというスタイルをとることを、あらかじめおことわりしておきたいとおもう。

1　Ｙさんとのかかわりから

「シマ共同体に生きる」という場合、まず想い浮かぶのは、Ｔさん、Ｍさん、Ｈさんの先輩にあたるＹさん（1956年生まれ）のことである。Ｙさんは、Ｍさんを字の青年会活動に誘った先輩であり、その字の青年会会長（1982年度）をしていた。Ｔさん、Ｍさん、たちより慕われ、尊敬されている。私は、このＹさんからシマ共同体を生きるということをめぐって、折にふれていろいろなことを教わった。「教える」ということばは、Ｙさんにはなじまないかもしれない。Ｙさんの折節のことばや姿から、私がさまざまなことを感じとる――それを私が「教わった」と表現しているのである。

Ｙさんは、あまり共通語が得意ではない。そうして、折々にシマグチを教えてくださる。たとえば、島から旅を終えて帰るときに、Ｙさんから「チムフジー？」と問いかけられたことがある。チムは「肝」、フズは「ほぐれる（解れる）」、旅により、肝がほぐれたか、という問いかけである。共通語に言い換えると、「満足したか」になるという。だが、その醸しだすニュアンスは、とても「満足したか」では表せないだろう。「肝」とは、心・想いとからだが分かたずに一体となったもの、「チムグリサ（肝苦さ）」「チムガナサ（肝愛さ）」「チムドンドン」「チムジュラサ（肝清さ）」などなど、沖縄には「チム（肝）」がついたたくさんのことばがある。その「チム」がほぐれたのかという問いかけそのものに、「チムフズ」感覚がからだに湧き起こってくるような感じがした。

そんなふうに、Ｙさんは折々に「ホーゲン（方言）」（シマグチ）の味わいを、教えてくださる。それは、伝統のことばだから大切にしようというような次元でなされるのではなく、Ｙさんにとって暮らしに根づき、その味わいをからだで“感じ”ているからこそ、そのシマグチを使い、味わいを伝えたいのだというふうに感じられる。

Ｙさんから学んだシマグチで、もう一つ心に刻みつけられたことばをあげてみる。この島には、平和と福祉を願い、「障害」をもつ人ももたない人も集い、交流する場としてつくられた民宿がある。この宿のつくり主はシマンチュではないが、つくられるときには青年会が協力し、そのときの会長がＹさんであったという。以来、けっして表に出ることはないが、ずっと中心的に支えてこられたのがＹさんである。Ｙさんは、島の外の世界との交流という要求を満たしてくれるものとしても、宿は大切な場であると語っていた。

そのＹさんが、宿の周りを掃除していたときに、ヤマトンチュの宿の客が、「ボランテイアですか、偉いですね」と声をかけたという。そのことについて、Ｙさんは「ボランテイアじゃないさー、ユイマールさー」と力をこめて語っていた。ユイマールという語義を「相互労働扶助」であると理解していたが、このＹさんのことばをきいたときにはじめて、私は、シマ共同体を生きることばとしての「ユイマール」の意味を“感じ”たように思った。「奉仕」として讃えられるような行為は、シマ共同体を生きるうえで必要のないもの、人とひととは巡りめぐって、助け、いつか助けられ、また助ける、お互いさまなのだというふうな感覚が、そのことばからは感じられた。

Ｙさんは、ハタラチャー（働き者）である。昼は農作業機械のエンジニアとして働き、朝と夕方は、畑に出る。農作物は、手をかければかけただけ応えてくれるので、愛情が湧くという。Ｙさんは、今も太陰暦を大切に考えて、暮らしている。私にも潮の満ち干と暦の関係などについて、よく教えてくださった。そんなＹさんにとって働くということは、か

らだを動かして働くことのように、私には感じられる。ジンブンというシマグチの意味を尋ねたときには、「知識に対する知恵のこと」、「頭がいいっていわれるより、ジンブンがあるっていわれたほうがいいに決まっているさー」と語っていた。

そんなYさんの学校の先生への見方は厳しい。「今、思うと、学校の先生のほうが変さー。みんなが農作業やってるときに、背広着て、机に座ってさー」小学校時代は、勉強ができなかったわけではけっしてなかった（とくに理数系は得意だった）けれど、「ホーゲン」を話して、よくいちばん前の席に座らされたという。

また、こんなふうにもいう。「高校で先生が教えてくれたことで、一つだけ覚えてることがある。学校は、歴史で百人のうちの一人しか教えんけど、ほんとに支えてるのは、あとの九十九人さーって。そうだよなー」そこには、「あとの九十九人」のうちの一人であろうとするYさんの自負のようなものが感じられた。

親御さんをはじめ働き者のシマンチュの姿を誇らしく大切に想い、シマ共同体にしっかり足を踏みしめて生きようとしてきたYさんにとって、学校で教えられる勉強や教師のあり方は、とても違和感（反感）を覚えるものであったのだろう。

だけれども、定時制高校（工業高校）時代の想い出を話すYさんは、実に楽しそうである。卒業式に自ら運転するタクシーでのりつけたタクシー運転手のクラスメートの話、授業後、先生とよくみんなで飲みにいった話などなど、さまざまな地域から、さまざまな年齢で、さまざまな職業の人々が集う場として、Yさんのなかに生きいきと学校体験は刻まれている。その頃の島は皆、貧しく、そんな貧しいなかで高校に行かせてもらったので、高校をやめるということは考えもつかなかったという。

姪のRさんは、高校を中退したとき、Yさんに「学校やめて何するかー」と「いちばん怒られた」という。Yさんの想いや考えは推し量りがたいが、「いちばん」というところにYさんのHさんへの愛情が感じられる。それは学歴社会に囚われたまなざしからではないだろう。Hさん自身にとって、そのことがこれからの人生において“中途半端”や“挫折”として抱え込まれることを、もっとも心配してのことばなのではないだろうか。Hさんは、今、通信制の高校に学び、卒業をめざしてがんばっている。

Yさんは、私がはじめて出会ったシマンチュである。都市のベッドタウンで高度経済成長とともに育ち、学校でも地域でも競争関係にまきこまれ、家族だけに守られて育ったというおもいの強い私の原風景にたいして、Yさんの話に広がる風景は、私にとってずいぶん異質なものだった。そんな私にとって、Yさんの姿やことばの一つひとつが心に刻まれるものであった。それはシマ共同体を生きる象（すがた）の具現として、私には映しだされている。

2　シマ共同体における共同性とは？

以上は、また外からのまなざしによる幻想化の仕組みであるのかもしれない。

さて、「シマ共同体」ということばを用いる場合、当然、そこに何らかの共同的関係が存在していることを想定している。その共同性とは、はたしてどのようなものであるのだろうか。以下は、このことを中心に、Tさん、Mさん、Hさんたちの発言をたどっていくことにしたい。

まず、シマ共同体における共同的関係という場合、その基底にあるのは、Iでふれたユイマールであろう。このユイマールについて、

Tさんはつぎのように語っている。

沖縄の独自の歴史の中で培われた文化だとおもいますよ。助け合いの段階があるんですよ。むかしは、お金じゃなくて、家を建てるために、共同体でお金を集めて、次はどの家をたてるんだということでやっていたんだと。仲間がいないと生活できないんだという一つの意識で結びついていたという共同体ですよ。A島がいい対象になるなというのは、僕も思うんですよ。

さらに自らの体験を踏まえて、つぎのように説明してくださった。

今、共同体としての話になると、葉たばこは、三十六年、親父さんの時代から引きついで、二代目が経営をまかされているわけですよ。うちは、そのときから同じ仲間が続けてきていますから、昔ながらのユイマール形式というのがありましてね。すべてみんなで、もしこっちの家の苗がだめになったら、こっちの家を切ってあげましょうと。

あるいは、畜産農家と葉タバコ農家ですね。堆肥をもらうために、畜産農家に自分なんかで堆肥を出してもらっていくと。そして、草植える時期になると、この草を畜産農家にあげるとかですね。そういう無償でやっているというのも、ユイマールの共同体なのかなと。やっぱり、与えるものと与えられるものと同じように対等なんですよね。

農業経営をめぐって、昔ながらのユイマールが息づいていることがわかる。生産の場でお金を媒介させない相互的関係が今も存在していることが、注目される。このシマに企業社会とは別の論理を見出すとするならば、その源はこの生活様式に求められるだろう。Ⅰでこのシマの階層の二極分化のさまについてふれたが、この固定化が、かえって一般農民層における水平的相互的関係を維持する方向で働いたとも考えられるだろう。

このユイマールをめぐって、たとえば先にあげたYさんの「ボランテイアじゃないさー、ユイマールさー」ということばや、またTさんの「沖縄の独自の歴史で培われた文化だと思いますよ」ということばから感じられるニュアンスは、肯定的なものといえるだろう。「ボランテイアじゃないさー、ユイマールさー」には、押し寄せる外からのことばを押しかえすシマンチュとしてのアイデンテイテイの拠り所として「ユイマール」ということばがあることが感じられる。それはシマの共同幻想のよすがといえるかもしれない。

その他にシマにおける共同の関係性という場合、注目されるのは、エイサーなどの行事をめぐって見られる異世代間の交わりの豊かさである。

二十歳になろうとするRさんとKくんは、つぎのように語っている。

Rさん　青年会からいつも一緒にやってた人達から高校生になったからエイサー、青年会のエイサーやらないねーって、言われて。巡回するんですよ、エイサー各区、それやってみないねって言われて、それで一応、一年から参加してるんですけど。ちっちゃい頃から見て、これかっこいいなとか、これ、あこがれ、あこがれが自分はあったんで、とってもやってみたいと思っていて。

Rさん　巡回して終わってあとから、とっても感動するっていうか、うれしくて。喜ばれるから、喜ばれたらうれしいし。

Kくん　年寄りに喜ばれたら、いちばんうれしい。

このエイサーは、もともとA島にはなかったものを、40周年記念事業の一環として、島の伝統の踊りをとりいれて、青年会が創作したものである。Rさんの“あこがれ”ということばが印象に残る。またKくんは、シマグチの敬語（お年寄りに対するもの）を「ばっちり」話せると実に誇らしそうだった。

またTさんは、字の役員の体験について、つぎのように語っている。

今やってると、字でやってるとですよ、いろんな体育部長やったり、自分のためだけど、でも、その地域のためにもなってるよと。ほんとは地域のためにやってるんだけど。逆に僕も、高まっていくわけですよね。（中略）

でも、やっていて、きついじゃないのかと、たまにくるときある。つらいなあと思うときもあるけど。でも、そういうなかで、いろいろ、叱られるよ、Hなんか。でもそれは協力者がいるなあと思って、うれしくなって。今日、文句言いにきたとか言って家に来るんだけど。あのとき、うれしかったね。去年の2月くらいだった。うれしかったよ、あのときは。あと友達○○がよ、一生懸命踊りはじめたさ。

今日はやらんと言うわけ。その前に先輩だけ楽しんで、民俗芸能研究する、僕なんかは話したかったわけですよ。（中略）何かあると僕なんか前に踊りを継承されているもんですから、前で踊ったりなんかして、先輩たちだけ楽しんでる、教えると言いながら、教えてくれないと言うわけ。おやっと思ったけど、それはうれしかったさ。よしじゃあ、今度ね、踊りやるから、いっしょにやろうなと。（中略）そういうと、地域のなか、いろんなことあるなあと思って。うれしかったわけ。

公的な立場で集団を運営していくには、さまざまな苦労があるとしのばれる。がそれが形式的なものとならず、たとえば踊りの継承という場（伝統の踊りの継承という世代間の文化伝達は、イニシエイションの一種でもあるだろう）において、他者との交わりあい、かかわりの深まりが生まれることを、Tさんは喜びとしている。

このような他者との交わりのもとにつくりあげていく体験、異年齢異世代の他者とさまざまな物語を紡ぎだす場が、喪われつつあるとしても、このシマには未だ濃密に息づいているといえるだろう。

こうした体験の場の一つは、青年会でもある。このことを、Hさんは端的につぎのように語っている。

高校のとき、もし自分が生徒会長なって、もしくはあるサークルのリーダーになってそういうこと（注　手づくりコンサート）をやろうかというとできたかもしれないけど。そういうことをすべて網羅してできるのが青年会だわけ。

（TさんとHさんの青年会への要求などの相違については、**Ⅳ**（長谷川担当）を参照されたい。また、このような学びの可能性を、地域に依拠したかたちで展望することが妥当であるかどうかについては、**Ⅵ**　デイスカッションを参照されたい。）

このような場で、このような体験をつくりあげていくときに求められる力とは、どのようなものであろうか。Mさんは、つぎのように語っている。

これ（青年会活動）は、ジンブンないと

できなかったはずね。学問ではできなかったはず。これははっきり言えるよ。ジンブンあるから、青年会活動できていた。学力なくても、俺でも人の上に立てるでしょ。頼りにもされるし。ジンブンがあれば、自分を活かせることができますよね。活かしながら、人の上に立って、指揮しながら、何かにたいして道が拓けていくというか、満足感が得られるということがはっきり言ってあったね。楽しかったね。

ジンブンとは、Ⅰでふれたように、生活の場に根ざした知恵という意味で、シマ共同体を生き抜く学力ともいうべきものである。ここでも（学校的な）「学力」と対比的に用いられ、ジンブンは声の文化圏における概念といえるだろう。Yさんは「頭がいいっていわれるより、ジンブンがあるっていわれたほうがいいに決まっているさー」と語り、Tさん（畜産科卒）も、山羊を捌く際には、大学卒よりも当然のことながらジンブンムチャー（ジンブンを持つ人）が重んじられる旨、語っていた。これらのことばから、ジンブンということばを磁場に、学校的世界を異化し、学校化されていない世界が根強くひらかれていることが感じられる。

このジンブンをめぐって、とても心に残ったのは、Hさんのつぎの二つのことばであった。Hさんは、私達のジンブンとは？という質問を受けとめ、じっくりと考えてつぎのように語ってくださった。

学力は1＋1が2になるけど、ジンブンは、1＋1が3になるわけさー。

ここでも「学力」との対比で定義され、魅力的な定義である。さらに、Hさんに対する“誠実”という評価をめぐって、つぎのようにいわれた。

誠実だといったけど、ハルサーのときは、ヤナジンブンも働かすさー。だから、人を誠実なんてことばで括ったらいけないよー。

人をたやすく一つのことばで括るなということばは、私の心に響いた。もう一つ、ヤナジンブンということばも心に残った。ヤナ（嫌な）ジンブンは、駆け引きなどのときに働かす知恵のことで、生きる上での必要悪ともいうべきニュアンスも含むという。「学力」ということばには、たとえ人を蹴落とし、競争に勝ち残っていくことが自己目的化されていても、ヤナ（嫌な）学力にあたることばは見られない。それは、「学力」が基本的に“個”に起因し、“個”に帰していくものとして考えられているからだろうか。それに比して、ヤナジンブンという表現には、人と人との共同的関係を背景としたまなざしが感じられる。

おわりに

以上、ユイマールやジンブンというシマグチにこだわりながら、シマに見られる共同的な関係性を中心に、綴ってきた。おわりに、「シマ共同体」というかたちでとりあげるときに、ふれたかったがふれられなかったことについて、三点ほどあげてまとめにかえたい。

一つは、第一章でふれた「一人前」への意識や「一人前」へのイニシエイションが、今日、この島でどのような意識として現れているのか、それがまた「学校」や「学歴」への意識とどのようにかかわりあうのかという問いである。つぎのHさんのことばは、Hさんの自分への厳しさ（という表現がよいかはわからないが）とともに、とても印象深い。

自分の場合は、階段を途中で降りてし

まっているわけだから、降りてしまっているために、自分で新しい階段つくって、これのためにいくような感じ、こういうことかな。

この「階段」とは、現れとしては学歴であるかもしれないが、その内実は学歴への囚われとしてはとらえられないだろう。それは地域共同体のまなざしを背景とした「一人前」への意識や内なるイニシエイションと深くかかわるものとしてあると考えられる。(**V**（照本担当）を参照されたい。)

地域社会におけるイニシエイションの衰退の一方で、学校の「聖」性がそれを補完するという関係性を指摘する論がある。[注②] が、現実の学校は、魅力的なイニシエイション執行機関としてはありえず、それを代行しえない。象徴としての自分殺しや他者殺しを伴う「大人になる」ドラステイックなドラマが「個」に覆い被させられ、「大人になる」ことの困難さがひしひしと感じられる今日という時代において、イニシエイションとかかわるHさんの「階段」の意味をどのように受けとめていったらよいのだろうか。もっと掘り下げて考えたい課題である。

二つは、シマ共同体におけるジェンダーの問題である。今回綴ったこの文章も、Rさんを除き、男性の声を主として、シマ共同体を描きだしている。青年会の創立四十周年記念誌を見ても、青年会会長はすべて男性であり、男性の文章中心に編集されている。女性が綴った文章を見ると、「女子青年は結婚すると、すぐ退団ということでした」や「女子会員は、(中略) 家庭でいうとお母さんの役目だと思いますがなくてはならない存在です」という記述が見られる。[注③] このように性役割が奥深く“自然に”組み込まれたあり様が、シマ共同体とどのようにかかわりあうのかについては、さらに考察が必要であろう。(**VI** デイスカッション参照。)

シマ共同体は、支配的秩序を維持する方向でも働く。「シマ共同体」という名づけがおおい隠すものについても、鋭敏にとらえなければならないだろう。

三つは、シマ共同体から外の世界への要求である。お話をきいたみなさんに共通して感じられた要求は、外の世界での体験を経て島に帰ってきたいという要求と、外の世界との交わりへの要求である。Mさんは、つぎのように語っている。

自分ももちろん、自分も高まるんだけど、話を高めた自分が帰ってきたら、島のためになると。僕もこれは、今でもあるよ。

このことばは、イニシエイション（旅の体験）の文脈でとらえられるとともに、普遍的な要求としてもとらえられるだろう。Yさんも、先に述べたように、民宿へのかかわりは、外の世界との交流という意味で自分にとって大切な位置づけであると語っていた。

一方、私をはじめ外からの要求もある。「シマ共同体」ということばのもとに、たとえば人を「透明な存在」にしてしまう都市のニュータウンとは対照的な、他者との物語を紡ぎだす場として、学校化社会や企業社会に組み込まれないオールタナテイブな学びの可能性を見出す立場もあるだろう。その可能性の検証には、さらにさまざまな角度からの検討が必要だろうし、外からのまなざしによる安易な幻想化は許されないだろう（**VI** デイスカッション参照)。それでも、少なくともたとえば私にとっては、学校化社会や企業社会への内なる囚われから解き放たれる道筋として、Yさんとの出会いをはじめ「シマ共同体」は意味深い場として存在している。

このような外からのまなざし・要求とシマンチュの“声”・外の世界への要求とが、ど

のような対話を生み出しうるのか、あるいはすれ違っていくのか、あるいは相互的に共に何かを紡ぎだしうるのか、今後、実践的に共同探究ができることへの希望を述べ、この項を閉じたい。

（注）

①冨山一郎「伊波普猷を読むということ」「伊波普猷没後五十年記念シンポジウム ―『沖縄』の時代・新しい自己像を考える」（主催　沖国大南島文化研究所、沖縄タイムス社）1997年12月４日、タイムス・ホールにて。

②中西宏次「イニシエーションとしての学校」、椎口育郎「『おとなになる』ということをめぐって　―『イニシエーションとしての学校』再論」教育解放研究会『教育解放』月報15、1997年９月。

③『Ａ村青年会　創立40周年記念誌』1991年、96頁。

Ⅳ 青年会体験

長谷川　裕

はじめに

私たちのA島調査の中でインタビューに応じてくれた人たちの多くは、この島の青年会の活動に参加した経験をもっている。特に、Tさん、Mさん、Hさんの3名は、1980年代の後半から1990年代初頭にかけて、青年会の会長の役職を体験している。青年会を通じて得た体験は、今の自分に多くの影響を与えている――インタビューから、3名いずれの場合も、そういうふうに考えていることがうかがわれた。そこでここでは、この3名の青年会体験を取り上げ、インタビューからわかったことやインタビューから示唆を受けて考えたことを、次のような順序で述べていきたい。

まず、話の前提として、A村青年会の歴史を、彼ら3名が青年会を体験し始めた時代である1980年代の前半ぐらいまで、A村青年会創立40周年記念誌編集委員会『A村青年会創立40周年記念誌』(1991年)に基づきながら、ごくごく簡単におさえておきたい(1)。

次に、3名が青年会を各自にとってどういう意味をもった体験だったと考えたり感じたりしているかをみていきたい。こうした青年会体験の意味づけ方ということについて、3名には各人各様の特徴があるように思えたので、その点を比較対照しながら論じていきたい(2)。

さらに、Tさん、Mさん、Hさんというある特定の人たちにとっての青年会のもつ意味という話を離れて、もう少し一般的な話として、今青年たちが青年会活動に引きつけられるとすれば、それはどういう形でありうるかという問題について、2の議論を踏まえながら考えてみたい(3)。

1　A村青年会について

A村青年会は、戦後間もなく1946年4月に誕生した。誕生後数年経った1950年代の初め頃の活動内容をみてみると、ディベート、弁論会、劇や舞踊の演芸会、レコードコンサートなどの文化活動、バスケットボール、バレーボール、角力などのスポーツ活動が行われている。また、こうした活動の資金を得るために開墾や道路工事を請け負ったり、あるいは台風災害復旧や火災消火の活動を行ったりもしている。さらに、立法院議員選挙の立ち会い演説会の主催、B地区の土地闘争への参加といった、政治的な活動にも取り組んでいる。

このように、当時の青年会は、青年同士が集うて自分たちで楽しむ場であると同時に、村民全体の生活を立てていく上で必要な様々なことがらについて重要な役割を担う、村民にとって欠くことのできない存在だったといえる。

しかし、青年会の活動は、常に変わらず安泰だったわけではない。記録を繰ってみていくと、早くも1960年代半ばには、「青年は大勢居るのだが、活動を熱心にやろうとする者とそうでない者も居たりして統制がとりにくい」(『A村青年会創立40周年記念誌』80頁)という状況が生まれていることが記されている。さらに70年代初め頃には、「各分会の活動も滞りがちになり、いきおい村執行部の役員会も出席者が少なく流会が重な」り、「このまま惰性で会を運営していくより、一旦会を解散し、会員の自覚を促して必要とあれば

再結成したほうがより活発な青年会になるのではないか」という意見が出て、それについて議論が行われたという（89頁）。記録によれば、一旦解散してみようという議論は、80年代の初めにもなされていたようだ(108頁)。

しかし、こうした困難を一方で抱えながらも、1966年には米軍のミサイル持ち込みに対する抗議行動や、1974年にはB地区青年会会員が米兵に狙撃されたことへの抗議行動といった政治的な活動も引き続き行われていたし、1981年には劇団「青年劇場」による演劇『かげの砦』の公演の主催といった、A島の青年会にとって新しいスタイルの文化的活動も試みられている。活動の中心メンバーが限られ、役員選出に毎年のように苦労する（108頁）という状況がありながらも、青年会の活動が全体として衰退していたというわけでは、決してなかったといえるだろう。インタビューの中でも、字単位の分会の組織率はほぼ100％だったという話が出ていた。

3名が関わり始めた頃の青年会は、だいたいこんな状況だった。

2　3名にとっての青年会体験

ここでは、3名各々の青年会体験を、各人がそれをどのように意味づけているかということが中心になるように描いていきたい（①～③)。その上で、④で簡単なまとめをしておきたい。

①Tさんの場合

Tさんは、青年会の40周年記念行事が行われた1987年当時、2期目の会長をしていた。インタビューによると、この頃は、青年会活動が「盛り上がった時期」だったという。そのことが、30周年でもなく、50周年でもなく、40周年行事が行われた理由だったという。

Tさんは、高校卒業後、大学受験に失敗して、「農業でもやってみるか」というつもりで、一旦島に戻ってくる。ところが、結局そのまますぐには島に留まらず、翌年もう一度受験して畜産関係の大学に進学している。

Tさんは、18歳の時から青年会の活動に参加するようになった。その頃は、楽しかったけれど、ただ一会員として参加していたにすぎなかったが、大学を卒業して島に戻ってきてすぐに執行部のメンバーとなり、翌年会長に就任し、さらに次の年も会長の任に就いている。

Tさんが会長をやっていた頃は、40周年の記念行事の準備、記念誌の編集が何より活動の中心を占めていた時期だった。Tさん自身によれば、「僕なんかの時は、年がら年中、記念行事、記念誌だということで、毎日集まっていた」、「ふたつ上の先輩から僕までは、40周年のことだけしか考えてなかったんです。それだけでもう精一杯」、「僕の時は、青年会は40周年ということで、先輩が企画したものをやっていた。自分で会長をやったというカラーはないんですよ、はっきり言って。みんながやってもらったものを、ただ僕はのせただけ」だったという。

そうした活動の状況だったことに対して、Tさんはどんなふうな受けとめ方をしているのだろう。そういう質問を直接向けなかったので、推測するしかないのだが、そんなに否定的にはみていなかったのではないかと思える。というのは、Tさんは、青年会を通じて自分にとっての楽しみが得られたか自分らしいカラーを出せたかということも大切に思うかもしれないが、それ以上に、青年会が地域社会にとって意義ある存在であること、そういう存在であり得るように自分自身も力を発揮すること――そういったことにこそ、自分が青年会で活動することの意味を見出すのではないかと推測できるからだ。そうした推測が間違いでなければ、これまで村の一翼を

担ってきた青年会の40年の歴史を記念する取り組みに関わることそれ自体が、Tさん個人にとっても意味あることとして感じられていたのではないかと思われる。

こうした推測は、インタビューの中でのTさんの以下のような言葉を根拠にしている。

青年会っていうのは、郷土を創るために青年が力を合わせてやろうと。道のないところを、建設業者もいないわけですよね、ですから青年が役場からいくらかの金をもらって、朝早くですよ、コーラルひいたり、スコップで道作ったりするわけですよ。それはみんな青年会の運営資金だと。個人ではもらわないと。村をよくするために青年が力を合わせてやってきたのが青年会活動です。その後基盤整備がされてくると、青年会は娯楽の方に力を入れてくるわけですよね。今まで一生懸命貯めたのを、青年会がいろんな劇団よんだりして、島の皆さんに楽しんでもらおうと。もちろん入場費取りますから、それが青年会の活動費になります。もちろん、スポーツ活動とか自分たちが楽しむのもやりますけど。あとはエイサーして、お盆に先祖を祭って、島の人たちを楽しませようと。

今、青年会を経験した人たちが村を支えているわけですよね。今の青年会の若いリーダーというのは、もっと元気出してほしいなと。リーダーが動かないことには、活性化していかないと、島がですね。どんなことでもいいから元気出してやってほしいということだけですよね。

あるいは、共同研究者のひとりである照本との次のようなやりとり。

照本：先ほどの話を聞いていると、青年会活動というのは、かつては生活向上を青年会が担ってきたという、それで島づくりをやってきたんだという。それが整備が進む中で、今度は、文化活動みたいなものをつくっていく。

けれど考えてみると、高校中退者に限らず若者が島へ帰ってきたとき、仕事はそこそこあるというわけではない。そこで、文化活動もいいんだけど、地域の仕事づくり、地域の共同の販売所をつくるとか、作業所をつくるとか、そういうのも必要なのかと思ったりもするんですが。

T：それですよね。今は、娯楽のものでしか人を集められないんですよね。この前コンサートしたんですけど、役員が自分たちで練習して、青年会のコンサートだっていっているわけ。それじゃ、ちがうわけ。

Tさんにとって、青年会は何よりも、島の人々が暮らしを立てていく上で必要な活動を担うべきものとして、さらにはそうした活動の先頭に立つ島のリーダーが育てられる場であるべきものとしてとらえられているように思われる。そして、何よりもそういう場に自ら実際に関わった体験として、Tさんは自分の青年会体験を意味づけているように思われる。

②Mさんの場合

Mさんは、Tさんの次の次の代に会長をしている。

Mさんは、高2の時に学校をやめ、その後東京に出て仕事をし、2年ほど経った19歳の時島に戻ってくる。その時、Mさんの住んでいたCの字の青年会の分会の役員をしていたYさんから声をかけられたことが、Mさんが青年会に関わっていくことになるきっかけ

だった。その時の様子は、次のようだった。

酒飲みながらとかいろいろしながら、青年会ではこういうことしますよって、それが楽しくて。何でもいろいろ言われる、それが楽しくて。どんどん楽しくなっていくだけだった。人とのつきあい、話し合いっていうか、酒を飲みながら先輩とつきあいながらよ、この楽しさが上る一方だった。

Mさんは、自分が言いたいこと、やりたいことをためらわず出していくという姿勢で青年会に関わった。そして、何とか「自分のカラー」を出そうと試みる。

そうした姿勢をとっていたことは、Mさんが青年会に行き始めた頃についての次のような話にも表れているといえるだろう。

（青年会に行き始めた頃）自分にあまり命令調でしなかったんですよね。頭ごなしにこれやらないといけないんだというふうに言われたことないんですよ。お前はこれだけやらないといけないんだというふうには言われなかったです。それがよかったと思うんだけど。俺たちはこういうことをやってきたんだけど、お前もいっしょにやろうなっていうふうに。

「命令調」でなく、自分の考えや思いをきちんと受けとめてくれそうだ――そうした予感が、彼が青年会に積極的に関わり出す大きなきっかけになったことが、この言葉には表れている。

Mさんは、まずC地区の分会で活動し、やがて村の青年会の役員もするようになっていくが、その村の役員の集まりについての次の話にも、上で述べた姿勢がうかがわれる。

俺は字から来てるでしょ。来てるのに、相手は先輩たちばかりなのに、俺もかなり言うわけ。言いたいことは、もうここにある分だけ言う。思ったこと、すぐに口に出る方だから、自分の性格は。

さらにMさんには、自分の意思を率直に出しながら活動し、それに人がついてきてくれることに充実感を感じるという気持ちもみられる。

これ（青年会活動）はジンブンないとできなかったはずね。学問ではできなかったはず。これははっきり言えるよ。ジンブンあるから、青年会活動できていた。学力なくても、俺でも人の上に立てるでしょ。頼りにもされるし。ジンブンがあれば、自分を活かせることができますよね。活かしながら、人の上に立って、指揮しながら、何かにたいして道が拓けていくというか、満足感が得られるということがはっきり言ってあったね。楽しかったね。今もやりたいと思うし、やる機会があれば。

そんなMさんだから、Tさんの頃の執行部のあり方に対しても、「自分の印象では、自分たちがやりたいことを抑えられていたという感じ。だから、どっかでカラー出さないといけないわけ。どうやったら若い人たちもたのしくやっていけるのかなと」というふうに批判的に見ていた。Tさんもそのことを承知していて、「でも、Mははっきり40周年と今の青年会とは全然別だよ、僕は何もしないよ、言っていた」と、当時のことを振り返っている。

このようにMさんは、自分が言いたいこと、やりたいことを周囲にはっきりと表現し、それを実現していくことのできた体験として、自分の青年会体験を意味づけているように思われる。そのことは、青年会活動に限らず様々

なことに関して、自分のやりたいこと・思いを明確にしそれにもとづいてふるまう、たとえ今は自分のやりたいこと・思いと違ったことをしていたとしても、心の中ではほんとうにやりたいことやほんとうの思いははっきりしているというふうに自己のことをとらえ描き出そうとする——そうした彼の指向の表れである、ともいえるだろう。

とはいっても、Mさんは青年会活動の中で、ただ一方的に自分の言いたいこと・やりたいことを主張していたわけではない。むしろ、それらを他の人たちとの間でどう調整していけばいいかを学んだ——彼にとって青年会活動はそういう場でもあった。その点を彼は、インタビューの中でも繰り返し述べていた。

> 今の自分がいるのは、青年会に入ったからだと思うんですよね。青年会活動しながら、怒られて、人とのつきあい方も青年会活動の中で教わったわけよ、僕は。僕は、青年会活動をやって、全部吸収して、今の僕がいるのは、青年会のおかげ。

> 言葉遣い、もう全然できていない状態。まあ、これがだんだん青年会の活動しながら、先輩後輩をだんだんわかってきたように、俺は思う。青年会の活動がなければ、今の自分はないと思っている。たぶん、青年会やっていなければ、今島にいないと思う。自分はよ。はっきり思う。

③Hさんの場合

Hさんは、高2で学校をやめ、その後島には戻らず横浜に働きに出て、24歳の時に島に戻ってくる。

戻ってきて1年目は、部落の青年会のスポーツ大会に参加し、翌年同級生だったMさんに誘われて村の青年会の副会長に、さらに次の年会長になる。

Hさんは自分自身のことを、自分はこうしたい、こう考えるというはっきりとしたものがあってそれをめざして行動する、というふうなタイプではないととらえ、またそういうふうに自分を描き出そうとしている。インタビューの中でHさん自身はそのことを、「僕は客観的にいつも物事見ているわけじゃない」、「例えば、人とのことで、こういうことがあったよ、こう思ったよ、こういう感触を感じて」ということは言えるけど、というふうな言葉で言い表そうとしていた。もともとは「引っ込み思案で、全然話するようなタイプじゃない」とも述べていた。こうした点では、HさんはMさんとは対照的であり、Hさん自身も自分と比べながら「Mがうらやましい」と述べていた。

しかし、こうだからこうするとはっきりと言葉で表現できる形で、自分の意思が自分自身に対して明瞭になってこなくても、何かを感じたら、Hさんはその感じにしたがって行動してみようとする。行動する以上、やれるだけのことを精一杯やってみようとする。

青年会活動もそうだ。Hさんは、たまたまMさんから誘われるという機会があって、とにかく何かにひかれ青年会活動に参加した。しかしそれはたまたま選択されたひとつの選択肢にすぎず、別のきっかけがあれば別の選択をしていたかもしれないと、Hさんは考えている。

> 何でも前向きに考えようとしたら、青年会活動もとことんやりたいさ。じゃ、他に何か機会があってそこにはいったらそこでもとことんやるし。帰ってきてA島に青年会活動っていうのがあったから、青年会活動をとことんやったわけさ。

たまたま機会があって出会った青年会の活動であるが、いったんそれを選択した以上、

とことん一生懸命に、しかもできるだけ自分たちのやりたいことをやろうとする。そうした、自分たちのやりたいことをという指向は、Mさんとも共通している。この指向は実際には次のような形で表れている。

その前の年までクリスマスにはダンスパーティーやっていたわけ。年々下火になっているのがわかるさ。じゃ、クリスマスパーティーを盛り上がらないまま行事としてやっていくよりは、自分たちがもっとやりたいことがあるんだったらもっと他のことをやろうかという感じで。自分らが中心になって、飾りつけも自分らがやって、観客もよんで、自分らが楽しんでやる行事をしようということで、コンサートをやろうという話になったんだけど。

1年目〔副会長だった年〕はもうほんとに、行事こなすのでいっぱいだったんだけど、どうしても奥武山のエイサーに出たいなあっていうので、それからチャレンジしたんですよね。で2年目〔会長だった年〕にクリスマス・コンサートしたんですよ。2年目にはわかりますよね、だいたいの流れも、段取りもわかるし。とにかく執行部、ずっと忙しいですよね。段取りして片づけして、ま、これの繰り返しですよ。全然自分らが楽しめる余裕がないわけさ。だけど、このコンサートは自分らの手作りのものを作れば、われわれも楽しめるんじゃないかなあと。んで、よそでは雲仙のチャリティーのコンサートとかやっているんだけど、A島で何もしていなかったわけ。ちょっとこれもおかしいんじゃないかなあっていうんで、じゃあ、チャリティー・コンサートしようかっていうことで、したわけさ。

以上のように、Hさんにとって青年会体験は、偶然出会い何かを感じ、感じた以上とにかくやってみようと、やってみる以上とことんやってみようと、そんなふうに選ばれたひとつの選択肢を生きてみた体験として意味づけられているといえるのではないだろうか。

④まとめ

以上、3名の青年会体験の意味づけ方の特徴を、私なりに読みとり描いてみた。各人について一言ずつでまとめれば、Tさんの場合は、地域社会の中で意義ある位置を占める青年会を担う体験として、Mさんの場合は、他の人たちと調整しながらも自分の思い・考えを実現していく体験として、Hさんの場合は、偶然選んだ選択肢を精一杯生きてみる体験として、というふうにいうことができるだろう。

もちろんほんとうのところは、3名いずれの場合も、ここで描いたような青年体験の意味づけ方のどのパターンをも多少なりとも持ち合わせていただろうし、またここで描いたいずれとも異なる意味づけ方をしているという面もあるだろう。ただ、少なくともインタビューで語られたことを私なりに読みとったところによれば、①～③で描いてきたような形での意味づけの仕方が前面に出ていたように思われるのだ。

3　青年会はどう青年たちを引きつけられるか

2では3名各人にとっての青年会体験の意味づけ方の特徴をみてきた。そこでみられた青年会体験の意味づけ方の3つのパターンは、視点を変えてみてみれば、青年たちが青年会の活動に引きつけられていく際にありうる3つのパターンということでもある。そこで3では、この3つのパターンを手がかりにしながら、今青年たちが青年会に引きつけられていく可能性の高いパターンはどんなもの

であるかを考えてみたい。2ではあくまで、Tさん、Mさん、Hさんという3名の特定の個人のことを描いたにすぎないが、そこでみたことを参考にしながら、上のようなもう少し一般的な問題について考えていくこともできるように思う。

まず、地域社会の中での青年会の意義を感じて青年会に引きつけられるというパターン。これを、多数の青年に期待することは、今ではおそらくむずかしいだろう。青年会の活動内容を青年会の地域社会の中での意義がはっきりと感じられるような活動内容に変えていくことを通じてより多くの青年を引きつけるという戦略も、あまり公算は見込めないだろう。良きにつけ悪しきにつけ、こういう期待や戦略を空しいものにさせる程度に、現在の青年たちの間には自分中心主義の感覚が広がっている。そのことを前提にしてこの問題を考えていくべきだと思われる。

では、自分の思い、自分のやりたいことにこだわっていくというパターン、そういうパターンが展開していきやすくなるように、青年会の活動内容や活動スタイルをしていくというのはどうだろうか。現在の青年たちの間に自分中心主義の感覚の広まりがあるとすれば、これらのことは公算が高いのではないだろうか。

しかし実は、自分の思い・やりたいことへのこだわりという指向は、青年会のようにその地域の一定年齢の青年の全体を包括しようとするような規模の集団とは、必ずしもマッチしない。この指向が何らかの集団と結びつく場合、もっと小さな規模の集団と結びつきやすいと考えられる。この点が、こうした指向に青年会のような集団が依拠しようとしてもなかなかうまくいかない要因となっている。

この点は、インタビューの中の議論でも問題にされていた。共同研究者の照本は、

> 自分たちで何か手作りで楽しめることをね、独自のカラーみたいなのを出していこうってしていたわけだけど、その時、じゃあ自分たちはこれやりたいからっていうんでサークルみたいに集まって、野球やりたいのは野球、他のことをやりたい奴はそいつらでっていう発想じゃなくて、全体で楽しめるような、そういう行事を作っていこうとされたわけ？

というふうに質問している。この質問が示唆しようとしているように、自分たち独自のカラーへのこだわりというのは、それ自体ではむしろ、青年会のような規模の集団ではなくて、共通の嗜好をもつ者同士のもっと小規模な集団が分立していく結果につながりやすいと考えられる。MさんやHさんの時期の青年会が実際にはそうならなかったとすれば、そこには自分の思い・やりたいことへのこだわりということと同時に、それとは別の論理も働いていたはずだ。それがなんだったのかを掴まなくてはならないだろう。

ましてや今現在の青年たちの間では、共通の気分やノリや嗜好をもつ者だけのごく少人数の集団が分立しやすい傾向が強くなっているといわれている。そうだとすれば、自分の好きなことがやれる場をというふうに打ち出していっても、そんな場は青年会には求めないという反応がかえってきがちな傾向がますます強まっていると予想できるのではないだろうか。

では、偶然出会って何らかの魅力を感じてそこに引きつけられていくというパターンはどうだろうか。おそらく、今でもかつてでも、青年会の活動に引きつけられる人たちのかなり多くの部分が、こういうパターンによっているものと思われる。活動の社会的な意義に第一義的に引かれるわけでもなく、活動の中に自分の意思を強く刻み込んでいこうとする

のでもなく、たまたま出会ったことだけど、おもしろそうだからとりあえず一生懸命やってみようというのは、ふつうによくあることなのではないかと思う。

だから、今青年たちが青年会に引きつけられていく可能性の高いパターンといえば、こうしたパターンだということになろう。ただ、それはあくまでも結果的にこのパターンを踏みやすいということであって、意図的にこのパターンを展開させて人を引きつけようとすることは、他のパターンと同じくむずかしい。このパターンの場合のむずかしさは、人が何に引かれるかはその人それぞれであり、引きつけようとする側にしてみれば、引かれてくれるかどうかは相手次第だという点にある。当然、ある人たちを引きつけるその事柄が、別の人たちには違和感や反発を引き起こすという可能性もある。だから、どういう活動内容やスタイルをとればより高い確率で人を引きつけやすいかを考え、その活動内容やスタイルを採用するという戦略を採らざるを得ないが、しかし確率の高そうな活動内容やスタイルだからといって、それを実際に採用できるとは限らない。ひとつの集団がとれる活動内容やスタイルには、当然限りがあるからだ。

4　おわりに

3名からのインタビューの中での青年会体験についての内容をもとに、主に2つのこと（2及び3で論じたこと）について考えてきた。それらについても、十分に考察を尽くせたとはいえないし、考察すべき問題として取り上げることさえできなかった事柄も多く残っている。たとえば、なぜ3名がそれぞれに2で描いたような青年会体験の意味づけ方をしたのかを、各人が現在置かれている文脈や、各人が過去から引きずってきている文脈から説明してみるという作業が当然必要だが、全く手つかずである。青年会が多くの青年を引きつける可能性の高いやり方は現在という時点ではどういうものかという3で論じようとした問題も、結局答えを出せていない。そういった点について、またの機会に検討することを期して、とりあえずこの章を閉じたい。